

研究会報告

丸山 徳次

里山ORC研究会は、今年度、第5回から第9回までの全部で5回開催された。特筆すべきは、第7回の研究会を第50回コモンズ研究会（近畿地区）との共同開催による研究会として実施したことである。室田 武（同志社大）、三俣 学（兵庫県立大）、半田良一（京大名誉教授）、原田禎夫（大阪商大）、宮永健太郎（琵琶湖環境科学センター）等諸氏の参加があった。また、第8回研究会では、中堀健二氏（信州大学農学部森林科学教室）をゲストとしてお招きし、田端英雄氏（森林文化アカデミー）や森林総研の面々の参加を得た。

今回のこの報告においても、丸山の視点から各発表の概要をまとめ、場合によっては独断的な批評を試みることにする。あくまでも議論の刺激材料の一つとなることを願うての批評である。

全5回の研究会の日時および発表者・発表タイトルは次の通りである。

第5回研究会 2005年5月26日（木） 18:00～20:00

於：龍谷大学深草学舎紫英館 第2共同研究室

蔭山 歩「田上里山マップ事始め」

第6回研究会 2005年7月23日（土） 13:30～17:30

於：龍谷大学深草学舎紫英館 東第2会議室

(1) 寺田憲弘「茅葺き民家と観光－京都府美山町を事例として」

(2) 吉田 真「生態系におけるクモの位置と「龍谷の森」のクモ類」

(3) 龍口明生「里山と仏教との関わり」

第7回研究会 2005年9月10日(土) 13:00~17:40

於：龍谷大学深草学舎紫英館 5階会議室

- (1) 牛尾洋也「土地所有権論の再考 -都市景観訴訟を手がかりに-
- (2) 池田恒男「『コモンズ論』と『コモンズ論』的所有論への疑問
-環境問題と所有論・国家論との繋がりについて」

第8回研究会 2005年11月26日(土) 16:00~18:30

於：龍谷大学深草学舎紫光館 5階REC会議室

中堀健二(信州大学農学部森林科学教室)

「信州周辺の里山利用の歴史と植生の変遷」

第9回研究会 2006年3月10日(金) 11:00~18:00

於：龍谷大学深草学舎紫光館 5階REC会議室

- (1) 白水士郎「環境プラグマティズムから見た倫理と教育
-価値の進化に向けて-
- (2) 稲本志良「集落営農の現実と理解をめぐって」
- (3) 平田厚志「『井伊家文書』から見えてくる西本願寺初期「学寮」の諸相」
- (4) 高桑 進「里山を活用した大学における新しい環境教育の取り組み
について-4大学里山学生交流を通して-

第5回研究会について

蔭山 歩「田上里山マップ事始め」

新たにRAになっていただいた蔭山氏は、すでに仰木地区で「仰木・里山地蔵Map」や絵地図を作成した経験をもつ。絵地図の作成とは、地域住民からの聞き取りに始まり、地域住民たちへの公開に終わる。絵地図は、人々の地域における記憶の固定化であるとともに、それぞれの住民の存在の確認でもある。吉田初三郎から影響を受けたという蔭山氏は、仰木での経験を今後は田上で活かしていきたいと抱負を語った。その成果が楽しみである。

第6回研究会について

(1) 寺田憲弘「茅葺き民家と観光—京都府美山町を事例として」

①観光、②美山町のあらまし、③美山町における茅葺き民俗の変化、④茅葺き屋根に対する意識、⑤見られる価値の生成、⑥村おこしへの取り組み、⑦「観光」に対する意味づけ、といった順で発表がなされた。文化庁の伝統的建造物群保存地区にも指定されている美山町北地区の茅葺き民家群が美山町の観光資源となっており、観光シーズンには一日に数千人の単位で観光客が訪れる。1988年に「村おこし課」が設置され自然文化村がオープンした。1993年、グリーン・ツーリズム構想策定、北地区に民俗資料館開設。2000年、北地区に有限会社きたむら設立。村おこしと観光資源化と北地区の有利性と相互の関係が美山町全体の問題となっている。

(2) 吉田 真「生態系におけるクモの位置と「龍谷の森」のクモ類」

①糸の魔術師・クモ、②クモの生活いろいろ、③環境指標として使われる生物、④どのような動物が環境指標として適しているか？ ⑤環境指標としてのクモ、⑥里山とクモ、⑦「龍谷の森」のクモ類、といった順に話がなされた。クモは肉食者であり種類も多く（日本で約1300種）、種類構成を調べることで、その場所の自然の特徴や豊かさを測定できる。クモ類が激減すると生態系が変貌する（例えば強い農薬の多用によって水田や畑のクモ類が激減すると害虫が大発生する）。そういう意味でクモはキーストーン種である。「龍谷の森」は意外に自然度が高い里山林であり、1年間で23科120種を採集した。希産種や、チビシロカネグモなど滋賀県初記録種も採集した。開けた場所や水辺があれば、さらに多様性は高くなるだろう。

(3) 龍口明生「里山と仏教との関わり」

①バラモンの生涯、②アランニヤと里山、③仏教の根本、④森に於ける修行、⑤樹木の観察、⑥林野に住する功德、⑦「龍谷の森」近辺の問題；『方丈記』と里山、野辺の送り場としての里山（火葬場、埋葬地、墓地）。最初期の出家仏教徒はアランニヤ（山林、林野）に住し修行していた。仏教教団が拡大すると祇園精舎や竹林精舎などの建物に住むようになった。アランニヤは集落から一定の距離を持ち、薪を拾い、草を刈る場所であり、放牧場でもあった。しかし同時に盗賊や猛獣が出没する危険な場所でもあった。

修行の根底にあるのは、如実知見、如実観察、事物をあるがままに見、事実を事実通りに観察することである。インドの修行者の生活が教えてくれることは、里山に入って種々なることを体験することが、思考する基盤を養成してくれる、ということだ。『方丈記』には、京都、山科から「龍谷の森」がある田上までにつながる地名が登場し、里山の状況についての記述が見られる。

第7回研究会

(1) 牛尾洋也「土地所有権論の再考ー都市景観訴訟を手がかりにー」

国立マンション訴訟を一つの手がかりにしながら、ヨーロッパの都市景観と比較して著しく統一性を欠き無秩序である日本の都市景観のあり方を、土地所有権の論理の「日本の特殊性」に由来するものと見定めて、それを批判的に検討する。日本の「土地所有権論は、近代的所有権論としては未成熟なまま、公法・私法の二分論と国家的法律実証主義的な所有権理解のもとで、私的絶対主義的な所有権として理解されたまま、その公的制約的原理を内に含んだ所有権の社会化論や、所有権とは切り離された土地あるいは「空間」の利用・管理の側面のみが別の法律構成によって論じられる都市法論、さらに都市環境問題としても土地所有権問題から離れ、「(都市)環境」という公益的価値実現のため私的土地所有権を公的に制限し、その手続保障のための市民参加や情報公開をもとめるという傾向」にある。「(都市)の多様な特殊性を所有権論のレベルで理論化する課題がなお残されている」のである。

景観破壊を私的所有権の無原則な肥大化に由来するものと見るのとはまったくことなり、むしろ景観保全を所有権の再解釈（原型的な意味へ差し戻す？）ことによって達成しようとする冒険的な提言だが、人格権の発展という枠内で所有権を捉えることは、むしろ近代の本流に棹さすものとも言えるだろう。

(2) 池田恒男『「コモンズ論」と『コモンズ論』的所有論への疑問ー環境問題と所有論・国家論との繋がりについて』

①環境問題とコモンズ論、②社会学的コモンズ論の曖昧さと弱点、③環境社会学を舞台とした環境問題をめぐる「所有」論争について、④「コモンズ論」の批判的継承のために。日本の環境社会学者たちによるコモンズ論は、「所有」や「管理」に関する理論的

枠組みが狭すぎ、また「コモンズ」の政策的位置づけと国家の位置づけに関して余りに無自覚的にすぎる。「所有」については、近代的イデオロギーとしての「所有権」と区別して再考する必要があるし、そもそも近代社会の規範的枠組みの正確な理解が前提的に必要である。また、環境問題を規定する政治的枠組みを避けてはならず、媒介者としての国家の位置づけ、役割を明確化する必要がある。それなくして所有論を発展させることはできない。

第8回研究会

中堀健二「信州周辺の里山利用の歴史と植生の変遷」

広葉樹の若葉を田に踏み込む刈敷の伝統は、記録上、すでに奈良時代にはあったが、信州では昭和40年代まで続き、「刈敷山」の名称が点在する。馬草地の必要性が大きかったことも、信州の特徴である。明治10年代には緑肥としてのレンゲが普及し、広がった。昭和14年の写真には、長野県下草刈競技会の記録が見られる。土地の利用に関して一つの結論を言えば、地域外資源の利用が始まれば植生が変化する、ということである。

第9回研究会

(1) 白水士郎「環境プラグマティズムから見た倫理と教育—価値の進化に向けて—」

①環境プラグマティズムの基本主張・戦略、②ウェストンの「価値の共進化」、③環境倫理の「作法」と「語り」、④「風景」の価値の語りと探求へ、の順で話がなされた。

人間中心主義と人間非中心主義との二項対立的論争を脱却して、現場の環境保護活動に役立つことを志向する多元主義的な環境プラグマティズムは、里山保全に関わった環境教育にとっても有効な発想を有している。つまり、倫理学者は特定の価値観や規範を最初から押しつけるのではなくて、各人の諸経験と価値観を語り合うその先の焦点として「里山」を位置づけつつ、語りの中から多様な価値観を聞き取る作業を提供することができる。

〔質疑〕環境プラグマティズムは、「動物の権利」論が霊長類保護に関して一定程度力強い議論を提供できたのに対して、多元的価値を標榜するだけに弱いのではないか。環境プラグマティズムには、最初から有効な問題領域と不得意な問題領域があるのではないか。そもそもデモクラティックな状況が前提になれば環境プラグマティズムは有

効なのか、それとも環境プラグマティズムがあくまでもデモクラティックな話し合いを形成する力になりうるのか。環境プラグマティズムが求める「合意形成」というのは、同じ価値観を共有するということではなくて、問題解決のために当面共闘できるということではよいはずである。

(2) 稲本志良「集落営農の現実と理解をめぐる」

①農業経済研究と集落営農・山村・山林、②農業・農村における集落、③滋賀県大津市における集落営農の1つの事例、④集落営農の諸形態と発展の方向〔所有（資本）－経営－労働の分離と結合：事業の構造〕、⑤集落と山林（里山）、集落営農と山林（里山）、の順に話がなされた。

京大農学部には農業経済学の他に林学、林政学といったものがあるが、およそ集落営農を論じるために必要な学科間・講座間の交流がなく、学問的交流が欠落していたことが反省される。共同経営の一形態としての集落営農だが、農業機械の共有と労働の協同によって基本は成り立ちながら、兼業化や高齢化の増大によって益々必要となっている。滋賀県大津市における集落営農の一事例として、上田上新免の集落営農は極めて興味深い。総戸数53の内農家は28で全て第二種兼業であり、他は離農しているが昔からの住民であり、外部からの移入者は存在しない。美味しい米作りを「売り」として平成11年には全国に先駆けて米穀小売業登録をしている。また、オーナー制を導入して固定の購買者を確保しており、追加困難な人気を博している。かつては山（瀬田丘陵）と集落とは多様な深い関わりを有していたが、里山との関係は今日「水」だけになっている。集落営農の諸形態と発展の方向には種々の形があるが、新免は伝統を保持しながらも隣村からの借地も含めて、斬新な集落営農を展開している。「主たる従事者」を明確にすることを求める農水省は、集落営農を認めてこなかったが、実態としては、兼業者の多くは会社員であり、しかも経理や営業の専門家である場合も多く、集落営農が高度の経営努力と責任能力によって運営されていることが多い。今日、「集落営農」は定義が困難なほど多様化し、ダイナミックな変化の可能性を有している。農水省や農業経済学者たちの視野が集落と山林、集落営農と山林に向かいつつある中で、当然、「里山学」に接近する可能性も出てきている。

(3) 平田厚志「井伊家文書」から見えてくる西本願寺初期「学寮」の諸相

井伊家文書の一つ『浄土真宗異議相論』を、彦根文書研究会という市民グループとの共同研究によって解読してきた。龍谷大学の礎石を成す「学寮」創建（寛永16〔1639〕年）をめぐって西本願寺教壇内部でいわば革新派である西吟を、守旧派である月感（肥後熊本延寿寺）が弾劾し、その騒動は西本願寺の内部紛争となり、幕府將軍補佐である井伊直孝（彦根藩主）の裁定にかけられた。問題は、真宗の信仰にとってそもそも学問的探求は必要なのか、学問がどのような機能を果たすべきか、にあったが、同時に、一向一揆のあと幕藩体制の中で生き抜く真宗教団が、幕府の宗教政策に呼応しつつ民衆教化を意図したことにあった。近江（滋賀県）は真宗王国であり、今も多数の真宗寺院が存在している。江戸時代以来、全国に一万箇寺ある浄土真宗西本願寺派だが、かつて寺院が地域の生活にとって有していた重要な機能を考えると、里山学・地域共生学にとって、寺院の存在とその機能を考察することは、極めて重要だろう。

(4) 高桑 進「里山を活用した大学における新しい環境教育の取り組みについて

ー4大学里山学生交流を通してー

龍谷大学、京都女子大学、金沢大学、九州大学の四大学の里山交流は、2004年2月の九州大学での交流会を皮切りに、すでに今年で3年目に入る。今年度の活動報告がなされた。これまで実施してみて判明したことだが、各大学がせっかく里山環境を所有しているにもかかわらず、それを知らない学生が大半であることだ。その最大の理由は、設けられている環境教育の関連科目が少ないことである。今後この点の改善が望まれる。持続可能な社会を構築するための環境教育推進法も成立し、今後は里山を勝つような環境教育の取り組みがモデルとして期待される。

〔今後の課題〕いつまでも「4大学」交流とばかり規定してはいられない。すでに中部大学から交流への参加依頼も来ている。今後は「大学里山交流ネット」といったような名称の常設独立機関を設ける必要があるだろう。また、更なる交流の拡大のためにも、全国の大学を調査する必要がある。都市部にあった大学が郊外や地方に移転したケースが多々あるが、開発の程度差によって、文字通り里山を所有している大学、里山地帯に存在しながらそのことを自覚していない大学、かつてそこが里山であったことを意識している大学、等々いろいろなケースが考えられる。この点を全国の大学に向けて調査する

必要がある。まずは里山を所有し、それを何らかの教育や研究に活用している大学がどれくらいあるのかを調べ、そことの交流を求めていく必要がある。